

令和5年度 理療科グループのまとめ

1 研究主題 「基礎的臨床能力の獲得に向けた取組」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月12日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
第2回	6月15日(木)	協議 ・実践事例様式とグループの視点について ・障害種別研修会の講師と講話の内容について
第3回	7月4日(火)	事例検討(1名)
第4回	8月7日(月)	障害種別研修会 「本学における鍼灸学専攻学生への学修支援について」 筑波技術大学 保健科学部講師 福島正也 氏 (オンライン)
第5回	9月13日(水)	事例検討(2名)
臨時	10月2日(月)	事例検討(2名)
第6回	10月11日(火)	事例検討(2名)
第7回	11月1日(水)	協議 ・学校訪問研修会グループ別研修会の協議内容と進め方について
臨時	11月15日(水)	学校訪問研修会打ち合わせ
学校訪問	11月17日(金)	協議 ・公開授業、実践事例のまとめについての意見交換
第8回	12月7日(木)	協議 ・今年度の研究のまとめ ・専門性セルフチェックシートについて
第9回	1月10日(水)	協議 ・次年度の研究方針について
第10回	2月7日(水)	協議 ・次年度の研究の進め方について

3 今年度のまとめ

研究対象の2学年の生徒たちは、授業には意欲的に取り組んでいるが、1学年で学習した科目の基礎的な知識・技術の定着が不十分なところがある。そのため、基礎的な知識・技術の応用が求められる2学年の学習を系統的に積み上げていくことの難しさがある。そこで、本主題を設定し、授業の中で関連する既習の知識・技術について確認する機会を増やし、必要に応じて学び直しの時間を設定していくことで基礎的知識・技術の定着を図るとともに、2学年に求められる知識・技術を習得できるのではないかとという仮説を立て実践を行うことにした。

事例では、解剖学や生理学の知識の不足のため、学習すべき疾患の病態を理解するのに苦労している様子がみられたり、他の教師が実習をみて、気付いたことを共通理解することができたりするなどの成果があった。

4 次年度に向けて

次年度、生徒は卒業学年を迎えることから、卒業までに習得しなければならない知識・技術の更なる積み重ねが必要である。各学期ごとに行う到達度試験において、正答率(達成率)80%以上を目標とし、各科目で基礎的な知識・技術の定着を図るための反復した学習に取り組んでいく。到達度試験については試験の担当教員以外も生徒の様子を観察する。また、到達度試験は事前指導→試験→事後指導をひとつの流れとして捉える。生徒の課題や苦手を克服するための事前指導の計画と実行→到達度試験による評価→到達度試験の結果からみえた今後生徒が取り組むべき課題と解決策の提示、授業での学び直しというPDCAサイクルの確立を目指したい。

令和6年度 理療科グループのまとめ

1 研究主題 「基礎的臨床能力の獲得に向けた取組」

2 研修内容（例）

	日時	内容
第1回	5月10日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
第2回	6月12日(水)	協議 ・各実践事例の実施時期・学級・内容について ・障害種別研修会の研修内容について
第3回	8月5日(月)	障害種別研修会「理療研修センターにおける技術研修とあはき師に求められる力について」 北海道札幌視覚支援学校附属理療研修センター 古川 直樹 氏
第4回	9月11日(水)	事例検討（1名）
第5回	11月26日(火)	事例検討（6名）
第6回	1月7日(火)	協議 ・今年度の研究のまとめ、2年間の研究のまとめについて
第7回	2月4日(火)	協議 ・次年度の研究について

3 今年度の成果と課題

研究対象の3学年の生徒は、授業には意欲的に取り組んでいるが、基礎的な知識・技術の定着が不十分なため、応用的な知識・技術を必要とする学習を系統的に積み上げていくことの難しさがある。そこで、基礎的な知識・技術の定着を図ることが、卒業後に求められる臨床能力の向上に不可欠であると考え、本主題を設定し、各授業の中で関連する既習の知識・技術について振り返る機会を増やし、必要に応じて学び直しの時間を設ける実践を今年度も継続することとした。

臨床能力の評価は、臨床実習担当教員による評価表を用いた評価と、学期ごとに実施している臨床能力到達度試験によって行った。到達度試験については達成率 80%以上を目標とし、各科目で基礎的な知識・技術の定着を図るための反復学習に取り組んできたが、実際の達成率は 70%程度に留まった。このことから、到達度試験の内容は基礎的な知識・技術を評価するのに妥当な内容であり、生徒の臨床能力を反映していると考えられる。

事例では、身体触察や関連する知識の確認に繰り返し取り組んだことで、昨年度と比較して知識・技術が定着している様子がみられた。解剖学や生理学の知識の不足から、疾患（病態）の把握や理療施術が生体へ及ぼす作用などの臨床的な学習内容の理解に苦慮する場面もあったが、それらを理解するために必要な基礎知識とは何かを遡って明確化し、要点を絞った学習を進めることで、生徒自身が系統立てて知識・技術を積み上げていけるようにする必要がある。

4 研究のまとめ

理療科の学習は1年次からの積み重ねである。解剖学、生理学、経穴等の知識、基礎実習で習得する基礎的な施術技術や身体触察能力は臨床能力の向上に直結するため、就労に向けて必要となる能力を生徒が1学年の段階から意識して学習に取り組めるような指導・支援の工夫を検討していく必要があることが分かった。

生徒たちは進行性の眼疾患のため、視機能が徐々に低下している。学習では、タブレット端末でデジタル教科書やノートアプリを活用したり、録音教材を活用したりしており、基本的なICT機器の操作は習得している。しかし、教師が主導した学習に取り組むことが多く、自ら主体的に学ぼうとする意欲に乏しい。卒業後の学びを補償するためにもICT機器を活用して自ら必要な情報を検索し、取得したいという学習意欲を高めていけるかが課題であり、そのための指導・支援について考えていきたい。